

## 2016 年度 Iwamoto-Fujii Ambassador の報告

神奈川県立こども医療センター

中 村 直 行

このたび、2016年度のIwamoto-Fujii Ambassadorに選出いただき、2017年1月28日から2月19日まで、San DiegoのRady Children's HospitalとTexasのScottish Rite Hospital(TSRH)に行っていましたので、ご報告させていただきます。

晴れて選出されたのち、まずSenior fellowshipは、自身で渡航先を選ぶところから始めます。あらかじめ行き先の制限がないのは感謝すべきことですが、逆に言うとなんて自分でセットアップする必要があります。

困ったときは助けてもらおう！ということで、友達の少ない私ですが、知る限りの人にあたりました。順天堂大の坂本先生や天理大の神谷教授から「TSRHはまったく滞在費がかかりません」と教えていただき、まずそこを含めることに決めました。そして、TSRHから移動しやすい病院を考え、その近隣を探し、北里大の斎藤先生や東海大の酒井先生にご協力いただき、西海岸のRadyを選択しました。この場を借りて深謝いたします。

Radyの初日は朝5時にFellowが車で迎えにきてくれました。外は真っ暗です。彼らの控室に行くと、朝5時台から走り回るように仕事をしていました。また、朝7時からのカンファレンスでは、Wenger先生を中心に熱い議論がなされていました。後のTSRHでもそうでしたが、PresenterのFellowはまさに火だるまになっています。でも、彼らは彼らなりの意見と事前の勉強成果(質問を予測し、仕込んでいたスライドをパッと出す)で名だたる上級医と渡り合う姿は見事で、これではいつまでたっても我々とは差がつく一方だと愕然としました。日本での「小児整形外科医になっていただけますか？」的な若い医者への気遣いなぞ皆無で、「Staffになりたいならはい上がってこい！」といった印象でした。カンファ中にそのままモニターがインターネットにつながりPubMedから関連論文を引っ張る、なんて芸当も頻回に目撃し、瞬時に知識や判断の裏付けをしていく作業は圧巻でした。

Rady Children's Hospitalは全米ベスト小児病院にも選ばれている有名な病院です(写真1)。広い敷地に、きれいな建物が散在しています。彼らはStaffに昇格すると我々とは比較にならない高収入を約束され、広いOfficeが与えられます。当日入院が主で、朝の6時に患者はやってきます。手術室は7時にはほぼセットアップが終わり、側弯手術に関してはほぼ専属スタッフのNsとMEP技師が関わります。脊椎手術のスタッフが固定され、皆、手術に精通しており、あうんの呼吸で進行する様はうらやましい限りでした。麻酔科の先生は日替わりでしたが、ご挨拶から入ると手術見学にベスト



写真1

なセンターポジションを提供していただきました。この年になると自身の経験値があるため、質問もたくさんさせていただきました。学ぶことも多かったです。何よりの驚きは側弯症(AIS)手術が本当に3泊4日で行われていることでした。手術も、Newton先生はAIS、Yaszay先生はNeuromuscularと棲み分けがなされていました。特に私の専門はNeuromuscular scoliosisなので、Yaszay先生とは、手術後CP側弯に関して一時間いろいろお話をさせていただきました。病棟、手術室の撮影は禁止だったので、気に留めたことはノートに書きまわりました。Castingの図を描いていたとき、Newton先生に後ろからのぞかれ、私のひどい絵を見て“フッフッフ”と笑いながら親指を立てられました。

Newton先生の側弯外来も面白かったです。Newton先生は、診療中、非常にcharmingなwinkを多用され、どちらかというと患児の母親が、俳優ばりのいい男であるNewton先生のファンといった印象でした。(写真2, 3)

次に訪れたのは、こちらもスーパースターが勢ぞろいするTexas Scottish Rite Hospitalです。(写真4~6)こちらは3年前のKPOSで訪れた際、同じinvited speakerとして行動を共にすることが多かったHarry Kim先生にHostになっていただきました。また、今回のVisitor shipに関しては、彼のLabo directorだった天理大の神谷教授に間を取り持っていただきました。日本のお菓子は包装から美しく、好まれると聞いていたのでお土産にたくさん買っていったら、ご夫妻に、「おまえは私たちのDietを台無しにする！」と笑われました。

現在、名古屋市大の黒柳先生がResearch Fellowとして在籍いらっしゃるのですが、なんとDallas Fort Worth 空港までデッカいLincolnで迎えにきてくれました。

TSRHは、小児整形外科領域の言わずもがなのFlagship Hospitalです。多くのVisitorが世界中から常に訪れているため、三つのVisitor専用部屋が無料で利用でき、滞在期間中の食事も無料という至れり尽くせりの病院でした。御年75歳のHerring先生もいまだ現役で、実に3年前まで脊椎の手術をしていたそうです。TSRHの小児整形外科医はKim先生とHandの先生以外は皆背骨を触ります。世界の小児整形外科学会に行くと、CPと脊椎が大きな柱であることを感じます。股関節と足部変形にやや傾斜し



写真2



写真3



写真4

ている印象のある本邦の学会事情を再認識させられました。

カンファレンスはやはり毎日朝7時から始まり、同じように Fellow は火だるまです。が、Rady とほぼ同じ文化を感じました。それもそのはず、Rady の Wenger 先生は以前ここのスタッフで、Herring 先生いわく「あいつは昔ここの仲間だったんだが、Rady が出来るときに出ていったんだよ」と。スーパースターの中でも特に光っていたのは、Chief of Staff の Sucato 先生でした。カンファレンスで、かなりひどい股関節破壊状態になっていた患者の治療方針が「関節鏡でちょっと観察して洗浄ぐらいでよいのでは」と消極的な方向に向かおうとしたその瞬間、後ろにドッカと構えた細川たかし風で恰幅のいい Sucato 先生が「ヘイ、ヘイ、ヘイ！ どうしたってことだい！ 俺たちが後ろ向きになってどうする。我々は常に前向きな治療していかなければならない。TSRH とはそういう病院だ。We never give up！」と鼓舞し、治療方針が180°ひっくり返って、攻めの関節形成へ手術方針が変わっていました。良くも悪くもカリスマ性のある先生で、自身もあのような Chief でありたいと憧れました。

Kim 先生の Host で来院しながら脊椎手術にしか入らないという不屈者の私に、仕事が終わると「どうだい？ 時間があれば私の部屋に話をしにこないか？」とよく声を掛けていただき、TSRH で感じたいろいろな違いを話し込んだりしました。週末には彼の豪邸にお招きをいただきました。まず、彼はストイックなアスリートで、自宅の2階には自転車のトレーニングマシンが置いてあり、Herring 先生と共に毎年100マイルレースに出るそうです。ちなみに Herring 先生の膝 Xp をたまたま彼の外来で見る機会があったのですが、「これ、どう思う？」とかまをかけられるほどの重度 OA であるにもかかわらず、自転車は Kim 先生より速いらしいです。Kim 先生のお古自転車を借り、まず近くの湖の周回道路10マイルをかなりのペースで回った後、奥様お手製のとてもおいしい料理に舌鼓を打ち、最後には ping-pong 対決をさせていただきましたが、いずれもまったく勝負になりませんでした。その点、留学中の黒柳先生はサイクリング、ピンポンとも互角に渡り合っており、ある意味、留学の成果はしっかりと出ているようでした(笑) (写真7)。



写真5



写真6

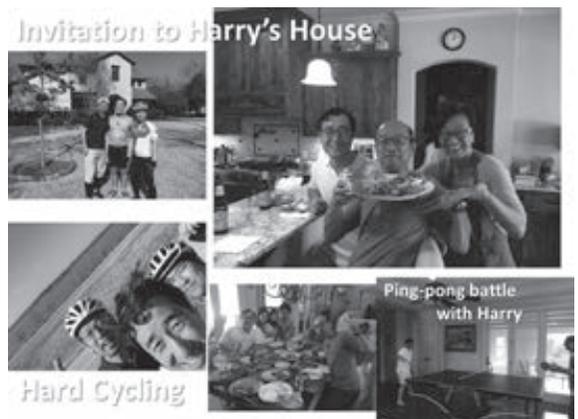


写真7

それ以外にも、興味深いものが尽きませんでした。

文化的側面を感じたのは四肢切断に関する環境です。形ばかりの四肢を再建するよりも切断してより機能の高い義足を利用したほうが reasonable だという文化、聞きしに勝るもので、Herring 先生の義足外来は衝撃の連続でした。普通の中学生在が、カーボンブレードの義足で現れます。その値段を聞くと、両側作製で 2000 万円を軽く超え、私が「家一軒分だ!」と驚いていると、「それもかなりいい家だよ、この辺なら」と Herring 先生が笑っており、まさにシェールガスで沸くテキサスならではの感じました。その高名さから世界中の富豪の子供なども来ているようでした。義足でバク転などしながらチアリーディングを楽しむ女子大生も衝撃でした。TSRH の地下はそのまま義足工場になっていて、壁一面に交換パーツが並ぶ絵は圧巻でした。調整もすぐできます。北米ではすでに市場で購入できるとされる赤外線プロファイラーを利用した、側弯体幹硬性コルセット作成用の 3D プリンターなども見せていただきました。Richards 先生は脊椎外科医として高名ですが、実は内反足外来をやっており、その丁寧な Casting と Super Gentle な家族への声掛けなどを見ていると、その小児整形外科医としての幅の広さを感じました。Birch 先生は、下肢変形に関して症例質問した際は、自分のパソコンから同じような症例を呼び出して丁寧に教えてくださいました。驚くべきは、その PC の中に見た患者ファイルの数とそれら症例がどんな症例だったかすべて記憶している恐ろしさでした。代表的症例ばかりなのでしょうか、パッと見ただけで 700 以上の番号が振られていました。Kim 先生の Perthes 外来も興味深く、症例とタイアップしながら見せていただいた perfusion MRI は、Xp に反映しない病初期からの重症度判定に非常に有用と思われたため、その sequence を教えてもらい、帰国後すぐに我々も利用し始めました。ただ、日本ではほぼ 100% Stulberg I, II に治癒すると思われる 6 歳未満の子供たちが、いわゆる Supervised neglect のために、20% ぐらいが Stulberg IV 以下となっており、日本では見ることもないようなひどい破壊を呈した股関節をたくさん見ることができました。Kim 先生も「自分たちの方法はこれが欠点であることは認識している。ただし、無駄な医療費をかけることなく 80% が Stulberg III 以上になるのだから、これはこれで十分な治療である」とコメントしていたのが記憶に強く残っています。これも文化の違いでしょう。

Rady に 1 週間、TSRH に 2 週間滞在し、私の senior fellowship は終了しました。本当は帰りたくありませんでしたが、当科部長就任後間もない頃でしたので、泣く泣く帰国しました。我々のような年になると、そう長く職場を留守にすることもままなりません。そういった点ではこの IFA は良い理由になります。また、ある程度経験値を積んだ状態で、国際学会ではなく、国外の実臨床に触れると日頃の自分の仕事と比較する内容が多く、質問や議論が尽きません。先日、本基金の藤井先生にお会いした時、「その点を強くアピールしてほしい」と言われましたので、ここに記します。

40 代後半の私に改めて刺激を与えてくださった齋藤知行理事長、岩本幸英先生、藤井敏男先生、国際委員会委員の方々をはじめとする本学会員の皆さまに深謝いたします。